

中国語における「時」の表現について

小林 立

1. 形態変化

中国語は意味論的にみて、孤立語であると呼ばれている。

“それは語彙自体に一切の変化をおこさないからで、ヨーロッパ語が数や人称やテンスによってさまざまな変化をおこし、日本語が動詞の活用や敬語などによってさまざまな変化をおこすのとは正反対であらゆる場合にそのままの姿で現われる。” (1)

従って、中国語においては、

“……テンスを示す必要があれば文のどこかに、たとえば Jīntiān (今天) とか yǐjīng (已經) とかのように時間を示すことばを加えればよいので、全体を通して拘束を加えるような煩しさが無い。” (2)といわれる。

ところで、「他在这里工作」(彼はここで働く)という文に対して、「明年」「去年」といった時間詞を加えても、述語の「工作」には形態変化はないとするのが一般的な説明であると言えるだろう。

「他^〇去年在这里工作」

(彼は去年ここで働いた)

「他^〇明年在这里工作」

(彼は来年ここで働く)

述語の「工作」は文脈によって日本語の訳としては「働いた」「働らく」という意味を表すが、中国語としては「工作」であって、時の差とは無関係であるとされることが多い。

しかし、「去年」と「明年」とでは、過去と未来といった大きな差があるが、その差は動作・行為を表わす述語に対して全く何の影響も及ぼさないのである

うか。

「他去年/明年在这里工作。」という中国語の表現について、次のような指摘をされる中国人もおられる。

“どうみてもおかしい文で、まるで言葉を覚え始めたばかりの子供の舌たらずの言葉で完成していない感じである。この欠けている所を補ってみると

「他去年在这里工作^过。」(傍点は引用者)

「他明年要在这里工作。」(“ ”)

というべきであろう。この「过」は伝統的な文法学では「動態助詞」といわれており、ここでは仮りに動詞の「付属語」と呼んでおこう。この「要」は「助動詞」で未来を表す一類の「付属語」である。とすれば、中国語にはテンスを表す文法形式はないでもないといえそうである。” (3)

中国語においては「時」の差は、述語そのものに形態の変化は起きないが、もし付加成分の添加を以って、その表現が完成されたものになるとすれば、やはり「時」の表現と呼応して述語は形態変化を起していると言ってよいのではなかろうか。従って形態変化というものを狭義の意味で考えるか、それとも述語をとりまく付加成分の添加をも広い意味での形態変化としてとらえるかということにかかっていると思われる。「時」の差が要求する述語への付加成分の添加を包含して考えると、中国語にも表現における形態変化は認められると言ってよいのではなかろうか。

2 時間詞と時間副詞の位置

中国語の「時」にかかわる付加語は大きくは実詞と虚詞に分かれる。

「時間詞」「能願動詞」は実詞であり、「時間副詞」「時態助詞」は虚詞に属する。

これらの単語は述語との位置関係でみると、中国語においては「時間詞」「能願動詞」「時間副詞」は述語の前に位置し、述語を限定する働きをしている。これに対して「時態助詞」は述語の後に位置して、述語を補足する働きをしてい

る。

いま述語の前に来る「時間詞」と「時間副詞」を例にみると、「時間詞」は述語の前に位置するが文頭に位置することもできる。しかし「時間副詞」は述語の直前に位置するのが一般的である。

「時間詞」と「時間副詞」の位置は述語の前に来る点では共通しているが、「時間詞」が文頭にも位置することが可能な点が、実詞と虚詞という性格の差として示されている。

「時間詞」＋述語：

他_○去_○年_○毕_○业_○了_○。(彼は昨年卒業した)

去_○年_○他_○毕_○业_○了_○。(昨年彼は卒業した)

(×) 他_○毕_○业_○了_○去_○年_○。という言い方はしない。

「時間副詞」＋述語：

他_○们_○已_○经_○到_○了_○。(彼等はずでに着いた)

(×) 已_○经_○他_○们_○到_○了_○。

(×) 他_○们_○到_○了_○已_○经_○。という言い方はしない。

再_○见_○！(また会いましょう！→さようなら！)

(×) 见_○再_○！

「時間詞」と「時間副詞」は共に述語の前に位置するが、両者が共用される場合の位置関係は「時間詞」が「時間副詞」に先行する。

すなわち

「時間詞」＋「時間副詞」＋述語 となり

(×) 「時間副詞」＋「時間詞」＋述語 とは言わないようである。

他_○前_○天_○又_○来_○了_○。(彼は一昨日また来た)

(×) 他_○又_○前_○天_○来_○了_○。

他_○昨_○天_○已_○经_○离_○开_○日_○本_○回_○国_○了_○。(彼は昨日すでに日本を立てて帰国した)

(×) 他_○已_○经_○昨_○天_○离_○开_○日_○本_○回_○国_○了_○。

恐らくこれは「時間詞」が実詞であり、「時間副詞」は虚詞であるという差が、その語序を決定しているのではあるまいか。「時間詞」は実詞であるので自立性をもっており、文頭に位置することもできるが、「時間副詞」は虚詞であるため付属的性格の故に、述語に近い位置に来ることを要求されるからであろう。

ところで「時間詞」は、「点」と「線」の表現に分かれる。「点」としての時間を中国語では「時点」と呼び、「線」としての時間を「時段」と呼んでいるが、両者の文中における位置はことなる。「時点」の場合は既に見て来た如く述語の前に位置するが、「時段」の場合は述語の後に位置し、その語序には明確な区別がある。すなわち、

「時点時間詞」＋述語＋「時段時間詞」

という語序は動かせない。従って、

明天 見！（明日あいましょう！）は、

（×）見 明天！とは言わないし、

休息 五分钟。（五分間休む）は、

（×）五分钟 休息。とは言わない。

但し、否定の表現はよい。（○）五分钟 不 休息。

もっとも「時段時間詞」が述語の前に位置する表現がある。これはその時間内にどんなことが起きたか、その間どんな様子であるか、といった意味を表わす。

两天进了三次城。（二日間に三度町へ行った）

一天上两节课。（4）（一日に二コマ授業に出る）

「時段時間詞」は補語として述語の後に位置するが、修飾語として述語の前の状語の位置に来ることができる。「時点時間詞」もまた状語として述語の前に位置するが、補語として述語の後に位置することもできる。

生于一九五九年。（一九五九年に生れた）

3. 過去・現在・未来

「時間詞」は、過去・現在・未来を明示するが、「時間副詞」も過去・現在・

未来という時の差を表現できる。従って「時間詞」がなくても「時間副詞」があれば、それが過去・現在・未来のいずれの時であるかが分かる。

〔過去〕 事柄が既に発生または完了していることを示す時間副詞としては、「已經」「曾經」「剛」「才」などがある。

他已經是个很得力的干部。(彼はすでに非常に実力のある幹部になっていた)

他剛来。(彼はいま来たところです)

他才来。(彼はいまやっと来たところです) (5)

〔現在〕 始まった動作が、いわば軌道にのって進行し、継続している様態を示す時間副詞として「在」「正在」「在这ル」「在那ル」などがある。

我正在给他写信呢。(私はちょうど彼に手紙を書いている最中です)

我们在这ル商量那件事呢。(私たちはいまちょうどあの件について相談しているところですよ) (6)

〔未来〕 事柄が「……しようとしている。……しかけている」という待機的な姿勢を描き出したり、近い将来を示す時間副詞として「快」「要」「将」「就」「馬上」などがある。

他快五十岁了。(彼はもうすぐ50歳だ)

天要黑了。(日が暮れようとしている)

天将明。(夜が明けようとしている)

他就走了。(彼はすぐ出かける)

我馬上就回来。(私はすぐ帰って来ます) (7)

以上の如く、「時間副詞」が単独で用いられる場合、話者の発話時を基準にしていると考えられるから、その「時間副詞」から過去・現在・未来という「時」の差を知ることができる。

「時間副詞」はそれ自体で時の差を表示できることから、「時間詞」と組み合

わせて用いられると、「時間副詞」がもつ「時」の差は「時間詞」との関係で、
 相対なものに転化する。

〔過去を表す時間副詞〕

昨天_{△△}我_△来_△到_△的_△时_△候_△，会_△议_△已_△经_△开_△完_△了_△。（昨日私が着いた時，会議は既に終
 わっていた）

明天_{△△}我_△到_△城_△里_△的_△时_△候_△，会_△议_△大_△概_△早_△就_△开_△完_△了_△。（明日町に着いた頃には，会議
 はとうに終わっているだろう）(8)

〔現在を表す時間副詞〕

昨天_{△△}，我_△回_△来_△的_△时_△候_△，他_△在_△唱_△歌_△。（きのう，私が帰ってきたとき，彼は歌を
 唄っていた。）

明天_{△△}，我_△回_△来_△的_△时_△候_△，他_△（也_△許_△）在_△唱_△歌_△。

（あした，私が帰ってくるとき，彼は歌を唄っているかもしれない。）(9)

〔未来を表す時間副詞〕

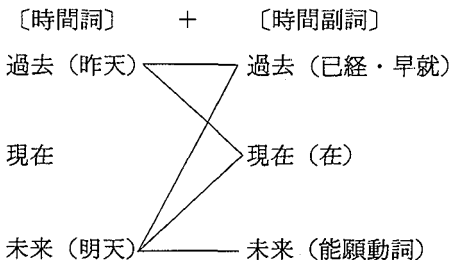
我_△今_△年_△打_△算_△买_△辆_△摩_△托_△车_△。（私はことし，オートバイを買うつもりだ。）

明天_{△△}天_△要_△下_△雨_△。（明日雨が降る。）

毕_△业_△以_△后_△，我_△还_△要_△回_△到_△农_△村_△来_△。（卒業後，私はまた農村に帰ってくる。）

他_△不_△会_△同_△意_△吧_△。（彼はおそらく賛成してくれないだろう。）(10)

以上の例から「時間詞」と「時間副詞」の結び付き方には、
 次のような関係がみられる。



いわゆる「時間詞」と「時間副詞」の「時」が一致する場合は、問題がないが、「時」が一致しない場合、すなわち「時間詞」が過去であって「時間副詞」が現在である場合とか「時間詞」が未来であって「時間副詞」が過去または現在であったりする場合は、その対応関係は相対的であると言わねばならない。

「時間副詞」はそれ自体において時の差を表示しうるからであろうか、「時間副詞」が現在または未来の場合は、「時間詞」により現在または未来の限定を要求する必要性が少ないためと思われる。「時間詞」が未来である場合、「時間副詞」として未来のものを要求するよりも、むしろ「能願動詞」(要, 会)や心理動詞(打算)などを要求しているところが特色として挙げられるのではないか。また短い挨拶ことばにおいては、「時間詞」と「時間副詞」を共用することもできるし、単用することもできる。

再 見! (また会いましょう! → さようなら!)

明天 見! (明日会いましょう!)

明天再 見! (明日また会いましょう!)

これらは単文における「時間詞」と「時間副詞」の結び付きの状況である。従って複文における「時間詞」と「時間副詞」の結び付きについてはまた別の状況がみられるかもしれない。

4. 時態助詞

中国語の「時」の表現は、「時間詞」や「時間副詞」「能願動詞」によって示されるが、「時態助詞」によっても表現できる。

動作・行為を表す述語の後に「時態助詞」を添えることで、「完了」「持続」「経験」「始動」「継続」「終了」といった様態の表現が行われる。

“……, 動詞本来の職務である動作そのものについては極めて細かい表現が用意されていて、特にその動作が完了しているか、それとも継続しているかということが、必要であればその動詞の後に助詞を加えるという方法で表現される。これが文法家のいうアスペクトに近いもので、たとえばただ「御飯をたべる」というときはchi fàn (吃飯)であるが、その動作が完了

しているときはchīle fān (吃了飯) といい、まだ継続しているときはchīzhe fān (吃着飯) という。またこうした動作だけの継続や完了でなく、chīle fānという動作が完了していることを話し手として認めるときは最後にもle (了) を加えてchīle fān le (吃了飯了) というし、継続していることを認めるときはna (哪) を加えてchīzhe fān na (吃着飯哪) という。” (11)

「時態」の表現は動作・行為の様態を示すものであるから、「時」の表現そのものではないが、発話時を基準にした「時態」の表現にあっては、「時態」の差がそのまま「時」の差の表現にもなりうる。例えば、「時態助詞」の「了」は完了を示すから「過去」を、「着」は持続を示すから「現在」を、「过」は経験を示すから「過去」をそれぞれ表示しているといえる。

「時態」の助詞としては、「了」「着」「过」と「起来」「下去」などがあげられる。同じく「時態」の助詞とされるこれらの単語についてみると、「了」「着」「过」は完全に「虚詞」として用いられているが、「起来」「下去」については、そのまま方向動詞としても使用することができるので、まだ「実詞」から「虚詞」へ転化しているとは言い切れない。「起来」「下去」については、「実詞」として用いられる場合と「虚詞」として用いられる場合の両面がある。従って、「時態」の助詞として「起来」(……しはじめる)「下去」(……しつづける)が用いられるのは、「起来」「下去」の用法の一部を占めているに過ぎない。

これらの「時態」を表す助詞は、虚詞であるから単独で用いられることはなく、いずれも実詞である述語の後に位置する。

“だから立つという動詞zhān (站) についても、立つという動作が継続していること、すなわち立ったままであることを示したいときはzhān zhe (站着) といい、それを話し手の見かたで承認するという気分を示したいときはzhān zhe na (站着哪) という。また立ち始める、すなわち立ちかけたということを示したいときはzhān qilai (站起来) といい、今まで坐っていたのに今から立ち始めたのだということをも認めたときはzhān qilaile (站起来了) という。また立ちかけてから立ち終るまでの状態を立つという動

作の継続として認めるときは、zhan na (站哪) といえるが、こうした短い時間の動作は客観的にそのものが継続すると考えることは困難で、ただ話し手の認識としていえるだけである。そのために zhan zhe na (站着哪) すなわち立ったままであることと zhan na (站哪) すなわちちょっと立ちあがっていることがこんな簡単な方法で区別される。” (12)

要するに「時態助詞」は述語の後に位置するのだが、「時態助詞」は単独で用いられる場合と、連用される場合とがある。しかし、連用される「時態助詞」としては「了」しか用いられない。「了」は完了・変化の意味を表す助詞であるので、「起来」とのみ連用される。「起来」は「……しはじめる」という意味の助詞であるから結び付くことができるのであろうか。その他の助詞「着」「过」「下去」などは、「着」と「下去」はそれ自体持続の意味をもつものであるが結び付かないし、「过」は経験を表すので、やはり完了・変化の「了」と結びつくと「…し終る。…してしまった」となり、意味が変わってしまう。

尚、「起来」と「了」との結びつき方は、「起来」が「了」の前に先行して、「起来」+「了」という位置になるが、「了」+「起来」という逆転した位置を占めることもできる。これは方言の言い方が「共通語」に入ったものとされる。

「述語」+「起来」+「了」

「述語」+「了」+「起来」

5. 已然と未然

中国語の「否定副詞」には、「不」と「没」の二種類があって、それが「時」の差との関連によって使い分けられる。

“中国語の否定表現に bu (不) と mei (没) の二種類があることも、他の言語には例をみない。bu は将来をみとおしての否定であるが、mei は現状までの否定である。中国人は否定しようとするとき、それは将来をみとおしての否定であるか、現状までの否定であるか、最初にそれをみきわめて発言する。そのどちらでもない、つまり、ただの否定というべきものは存在しない。” (13)

むろん「時」と深い関連をもつのは動作・行為の表現である。従って、

“判断や各種のムード表現、或いは形容詞的述語に代表される属性表現など、時間の流れには無関連な世界、或は時間を超越した世界で成立する事柄すなわち非運動・非変化の否定表現には一律に「不」のみが用いられるため、そこでは使い分けの問題は生じないが、一方、時間の流れの軸に沿って成立する運動・変化として動作・作用の表現においては、その使い分けが文法上要求される。そして、その使い分けを条件づけるものは、まさに已然対未然の対立なのである。” (14)

「時間詞」「時間副詞」「時態助詞」について、それぞれ過去・現在・未来の三分法で考えて来たが、「否定副詞」については二種類しかない。とすると、過去・現在・未来という三分法と「否定副詞」の二分法とのくい違いはどうか関係しているのだろうか。

“例えば時間に関して形式上無標である「他来吗？」（「吗」は疑問助詞）は「彼は来るか」という未然の動作についての疑問文であるが、それに対する否定の答えは必ず「他不来」（彼は来ない）であって、「他没有来。」であってはならない。未然の否定には「不」を用いなければならないのである。「他没有来」であれば「彼は来なかった」或いは「彼は来ていない」という以前の否定になる。以前に限らず、同時の表現「他在看书吗？」（彼は本を読んでいるところか）に対応する否定の答えにも、「没有。他没有看书。」のように「没有」が用いられる。そこに「不」を用いることはできない。「不」が未然の否定詞であるのに対して、「没有」は以前及び同時すなわち已然の否定詞ということである。” (15)

「否定副詞」の「不」と「没」の使い分けの基準としては、「未然」対「已然」という条件があると言えるが、これは否定の表現がいわゆる客観的な否定である場合についてあてはまる使い分けである。

しかし「不」による否定には、主体の意志が含まれている場合があり、そういう動作・行為を意図的にやらないという主体的な否定の表現であることも多

い。一方、「没」にはそういう動作・行為はなかったという客観的な否定の表現としてだけ用いられる。例えば、

爸爸起来了吗？（お父さんは起きましたか）

他还没起来。（お父さんはまだ起きていません）

怎么还不起来呢？（どうしてまだ起きようとしなの）(10)

というような意向の有無の差が表現される場合もある。

しかも「不」は話し手の発話時のみならず、過去（已然）における否定的な意向の表現にも用いられる。その場合は過去のことがらであるにもかかわらず当然「没」は用いられない。

「我昨天不吃是因为怕闹肚子。」《昨日食べようとしなかったのは、おなかをこわすのを恐れたからです》(11)

そういう動作・行為をしなかったのは、偶然ではなく、ある意向にもとずいてなされなかったという意味が含まれており、また疑問文の場合には、その人になにか意向ないし理由があつてのことに違いないと仮定する表現であることが多い。

「我叫你半天，你为什么不同意？」《君を長い間よんでいるのに、なぜ返事をしようとしなのだ》(10)

従って否定の表現には、客観的否定と主観的否定の二種類があり、「没」は客観的否定の「已然」に用いられるが、「不」は客観的否定の「未然」に用いられると共に主観的否定においては「已然」「未然」の区別を超えて用いられると言ってよいのではないか。

「已然」対「未然」という動作・行為の基準は、「時」の差の表現でもあるが、意図の有無の基準は主体的な意志の差の表現であり、この二つの尺度が併用されていると言えるのではないか。

中国語の「時」の表現を肯定文という正面から見ると、過去・現在・未来という三つに分けられるかに思われるが、否定文という裏面から見ると、現在を

含む過去と未来という二つに分かれるという真相があきらかになったと言ってよいのではないか。現在は不断に過去に転化し、未来は不断に現在に転化しているという時の流れに沿って眺めれば、二分法こそ中国語における「時」の表現の真実を言い当てているものと思われる。

まとめ

中国語には文法的にテンスの範疇はないといわれるが果してそうだろうか。中国語は孤立語といわれる通り、述語それ自体が変化することはないが、その代りに別の単語が述語に付加したり補足されたりして、述語全体としてはやはり時の差に応じて変化が生じている。これも広い意味での形態の変化と考えてよいのではないか。

中国語は一つ一つの単語についてはいわゆる形態変化はみられない。しかし「時」の差は述語に「時間詞」「時間副詞」「態願動詞」「時態助詞」などを付加語として添えることによって表現される。これらの付加語は「実詞」と「虚詞」に大きく分けられるが、実詞である「時間詞」「態願動詞」は述語の前に位置し、虚詞の「時間副詞」は述語の前に、「時態助詞」は述語の後に位置する。なお、これらの付加語は、この小論では触れていないが、述語をはさんで前後に位置して「時」の差を表現しているので、それらには呼応した型がみられると言ってよい。

中国語における「時」の差は、付加語である「時間詞」「時間副詞」「時態助詞」などから見て、「過去」「現在」「未来」の三つの区分が可能であるが、「否定」の表現から見ると「已然」「未然」の二つの区分しかないことが明らかになる。すなわち肯定文を通して「時」を正面というか表から見た様相は三区分離られるように見えるが、否定文という裏側の表現からみた様相は、二つの区分ということになる。「過去」「現在」「未来」という三区分よりも、「過去・現在」「未来」という二区分が、中国語の「時」の真相に迫る分け方であると言ってよいのではないか。

〔注〕

- (1) 倉石武四郎「漢字の運命」9頁 岩波新書
- (2) 同上書11頁
- (3) 呉大綱“現代中国語動詞のテンス・アスペクト”「日本文学論集」第12号107頁
大東文化大学
- (4) 興水優「基礎中国話」42頁 東方書店
- (5) 大原信一・伊地智善継「中国語表現文型」161頁 江南書院
- (6) 同上書160～161頁
- (7) 同上書160頁
- (8) 木村英樹“中国語”「講座日本語学11」21頁 明治書院
- (9) 呉大綱“現代中国語動詞のテンス・アスペクト”「日本文学論集」第12号111頁
大東文化大学
- (10) 同上書112頁
- (11) 倉石武四郎「漢字の運命」11～12頁 岩波新書
- (12) 同上書11～12頁
- (13) 倉石武四郎「中国語五十年」122頁 岩波新書
- (14) 木村英樹“中国語”「講座日本語学11」28～29頁 明治書院
- (15) 同上書28～29頁
- (16) 香坂順一「基本文型中国語初級テキスト」13頁 光生館
- (17) 大原信一・伊地智善継「中国語表現文型」171頁 江南書院
- (18) 同上書171頁